

塾塾公開講座

～緒方洪庵先生生誕200年記念講座 第六段～

緒方洪庵の故郷・足守散策

と蛍狩りに朝鮮通信使に

坂本龍馬も訪ねた

軈の浦バスツアー

日時: **2010年**

6月5日(土) 6日(日)



6月5日土曜日:大阪駅 → **吉備津神社**(緒方洪庵の姉・喜智子嫁ぎ先 国宝社殿等見学) → **足守散策**(ランチ:足守プラザで「緒方洪庵定食」・緒方洪庵生誕の地・旧足守藩侍屋敷・商家藤田千年治邸・池泉回遊式庭園・近水園等散策) → **イタリアレストラン Osteria La Luminescenza** でディナー → 足守川界隈で「足守を守る会」の案内で蛍狩り → 苦田温泉「いやしの宿 泉水」泊

6月6日日曜日:苦田温泉「いやしの宿 泉水」 → 軈の浦散策・対潮楼と幕末満喫・(福禅寺対潮楼・いろは丸展示館) → 仙酔島の海鮮和食処「風花」で坂本龍馬御膳に鯛の塩釜焼きなど鯛三昧の昼食 → 大阪駅 → 難波駅 → 天王寺駅

緒方洪庵の姉・喜智子が嫁いだ吉備津神社

緒方洪庵生誕200年を記念し、1日目は故郷・岡山へ。晴天の大阪駅の桜橋改札口に午前8時参加者14名が集合した。

バスは神戸を抜け一路岡山を目指す。

11時半に岡山一宮に鎮座する吉備津神社に辿り着く。バスを降りて、境内の案内板にしたがい、参道の階段を上がると、出雲大社の約二倍の広さがあるという日本で唯一の「吉備津造り(比翼入母屋造)形式の国宝の本殿・拝殿が威厳をもって目の前に広がる。

洪庵先生の姉・喜智子は吉備津神社社家(神官)の堀家徳政に嫁ぎ二人の男の子を生むが夫に先立たれる。二男高尚は社家の藤井家の養孫となり跡を継ぐが洪庵の死後1年半後に京都で浪士によって45歳で暗殺される。洪庵も姉喜智子との縁がある吉備実神社に参拝したことだろう。



祈祷殿で正式参拝を受けた後、神社に伝わる桃太郎の鬼退治の元になった神話といわれる鬼役である温羅の轆轤(どくろ)を埋めたといわれる御釜殿での「御釜神事」を体験。総延長400メートルの長い回廊を進んでいくと、境内の弓道場での弓道の試合に向けてそれぞれの弓矢の手入れに余念がない多くの高校生たちが居並んでいた。青春の初々しい輝きに充ち溢れている凛々しい若き挑戦者たちの間をすりぬけて長い回廊を進んでいった。

御釜殿の小屋の前にいた。呼び込められて中に入ると釜があり、すでに「ボーっ」と大地から湧き立つような小さなもそもそと呟くような声をあげていた。神職の祝詞のあとに、巫女が湯を入ると、「ワォーン」とばかりに声を上げた。確かに、釜の下の大地の奥から何やら湧き上がってくるような音が部屋の構造と相まってなのか共鳴して響く。巫女は吉凶について、その音を通してどのようなお告げであったかは語らない。参拝者みずから音が言葉になって心に響いくそうだが…。釜で煎られた米粒が配られる。口に含むとほろ苦い。多くの人々がこの釜から発せられる不思議な響きに神妙な表情で対峙したのだろうか・・・。

それぞれの心に響いたお告げを受け止めて小屋の外にでる。外は初夏の日差し。記念写真を撮る。



緒方洪庵生誕地・足守の陣屋町を散策

またバスに乗り暫くするとバスは川沿いの小道を走る。その川が秀吉が梅雨時の雨雲を味方につけ突貫工事で堤を築き、高松城の水攻めに利用した足守川だ。秀吉が明智光秀の信長暗殺を知るのもこの地だったのだ。

バスが橋を渡ると、古い町並みが残る足守藩の陣屋町に辿り着く。木下家の初代足守藩主は木下家定(いえさだ)で、家定の妹の「ねね」が木下藤吉郎(後の羽柴秀吉・豊臣秀吉)に嫁ぎ、秀吉が関白に任ぜられた時(天正13年(1588年))大坂城に移りねねは「北政所」と昇りつめた。家定は関が原合戦前は姫路2万五千石の城主だったが、合戦には参加しないで北政所を守護した為、慶長6年(1601年)に石高は同じで備中足守藩主に所領替えになり、以後250年にわたり木下家が

この地を治めることになった。
 格子窓に漆喰の壁に瓦屋根をかざす「足守プラザ」の前でバスを降り、1階の**食事処「洪庵茶屋」**でてんぷらうどんに炊き込みご飯・鶏のから揚げ付きの「緒方洪庵定食」の昼食を味わう。
 昼食後は、地元のボランティアガイドさんの案内で、『足守まちなみ保存地区』を散策する。
 まずは街道を歩くと、江戸時代末期に建築された醤油工場が再現され樽を洗ったり運び入れたりした作業場でもあった広い中庭を中心に豪壮な商家の造りを今に伝える『**旧足守商家藤田千年治邸**』を見学。
 足守川を渡り、**緒方洪庵生誕の地**を訪ね、洪庵先生の銅像と顕彰碑をバックに記念写真を撮る。



そしてまた足守川にかかる葵橋を渡り、江戸時代初期に築庭された小堀遠州流の池泉回遊式の足守藩主木下家の庭園「**近水園**」を散策し、園内の資料館「**足守文庫**」では、秀吉の妻ねね様使用の塗の道中風呂や足洗桶、木下家にお越し入れされた姫様の豪華な籠が状態よく保管され、洪庵の直筆の掛け軸も展示されていた。



庭園を出ると、木下家14代当主で、武者小路実篤や志賀直哉らとともに白樺「白樺」を発刊した**木下利玄の生家**は修復中で、門の前から見学。二宮金次郎の銅像が校庭に立つ足守小学校の傍を抜けると、白壁の長屋門と土塀に囲まれた**家老杉原家旧邸**は書院造りの建物で、殿様をお迎えした御成門や茶室があった。玄関もいざとんなると長刀の先を通してふりまわせるような通し穴などの仕掛けや、逆柱があり締め切ると切腹の間となる小さな仏間など、武士の住まいとしての構造についてガイドの方から丁寧に案内していただいた。休憩所に戻り振る舞われたお茶をいただきながら、お土産や、足守名物のメロンを購入する。バスに乗り、足守藩主木下家の菩提寺で、藩主の遺筆など貴重な資料も数多く納められ、御霊屋（おたまや）には秀吉、北の政所そして木下家代々藩主の位牌が安置されている**大光寺**を見学する。訪ね来る人も少なく、本堂の大屋根は蛇行しているよう
 で補修のネットが掛けられ、寺院内の石段の両側に雑草が茂り、土壁の一部は剥がれていた。
 見学後、門前で写真を撮る。



安富牧場に Osteria La Luminescenza

ご案内いただいたボランティアガイドの方に別れをつけて、蛍狩りを楽しむまでにまだ時間があるので、**安富牧場**に立ち寄る。カントリーハウス風の店の中では搾りたての牛乳は無料で味見ができる。意外にあっさりとして、乳くさくない。新鮮な牛乳で作ったソフトクリームやジェラードが好評で、岡山市内からも家族連れやカップルが屋外でポニーを眺めたりしながらそれぞれに味わっている。牛は口蹄疫の予防の為、隔離されているようで店の近くには見当たらない。夕食前でなければもう一つと追加したくなるほどナチュラルな味わいだった。
 蛍狩りの為に宿で慌ただしく食事するよりは、どこか美味しそうな店はないかと、インターネットで検索している間に、総社市にある**イタリアンレストラン Osteria La Luminescenza**が気になる。倉敷のレストランで休業し、自宅兼店舗として開いたお店も以前のお店のお客さんが追っかけて食べにくると書きこみに、投稿された料理の写真の盛り付けがフランス料理のよ

うに繊細で、早速電話を入れ大阪から行くので岡山の食材でお願いしますと予約を入れた。足守から店に向かう途中に、バスの車窓に忽然と五重の塔が姿を現した。それは、岡山県内で唯一残る奈良時代に創建された備中国分寺の雄姿だった。他に高い建物がない田園風景の中に、そこだけが時間が止まったようなシルエットが優美だった。やがてバスは住宅街に入り、レストランの前に止まった。十四名が机を挟んで向かい合わせに座った。各自の前に飾り皿の上の赤いナプキンを取ると、一皿目は透明な海の泡のような硝子のお皿に上には、サザエや葡萄エビに蛸に鯛など岡山の海の幸に、シェフの実家の畑で取った間引き人参やクレソン等が彩りよく盛りつけられ、サッパリしたドレッシングが新鮮な素材に優しく寄り添っている。赤ワインがすすむ。



続いては、イカスミとトマトと生ハムの手打ち麺



が黄金色したお皿の上に輝いている。手打ち麺の程よい固さが嬉しい。メインは黄ニラと空豆のリゾットに

岡山牛のローストも素材の持ち味を生かした優しい味付けだった。熱々の自家製パンも焼き立てでとっても美味。デザートは焼きプリンに苺とキューウィにオレンジ、そして季節を先取りしたか



のような岡山の名産温室ピーヨーネはとても甘く、コーヒは香り高く食事を締めくくってくれた。お箸もフォークの隣に何気なく添えられており、夫婦二人で切り盛りするイタリアンレストランには変な気負いがい。インテリアから洗面所に飾られた一輪の花にまで趣きがあり、食材の持ち味を生かしながらも、手間を惜しまぬ料理人のこだわりや心づかいが更に料理とレストランの雰囲気をも美味しくする。岡山の食材をゆっくりと楽しめた夕食に、心も舌も目もお腹も満ち足りた。



インテリアから洗面所に飾られた一輪の花にまで趣きがあり、食材の持ち味を生かしながらも、手間を惜しまぬ料理人のこだわりや心づかいが更に料理とレストランの雰囲気をも美味しくする。岡山の食材をゆっくりと楽しめた夕食に、心も舌も目もお腹も満ち足りた。

料理人のこだわりや心づかいが更に料理とレストランの雰囲気をも美味しくする。岡山の食材をゆっくりと楽しめた夕食に、心も舌も目もお腹も満ち足りた。

イタリアレストラン Osteria La Luminescenza

(オステリア ラ ルミネセンツァ)

総社市三輪 1065-7 TEL0866-92-4239

足守川に乱舞する蛍の光に感動！



食事を楽しんでいる間に、日が暮れ始めた。夕闇が迫る足守に戻り約束通り午後8時に地元のスーパーの駐車場に辿り着く。

川原の清掃や見回りなどで蛍の保護活動を行っている『足守を守る会』5代目会長の長門修二氏の案内で、足守川沿いの道にでる。先ず夜空の星の輝きに目を奪われる。次に河原に目をやると小さな蛍の光がちらほらと飛び交っている。

「先の橋まで行きましょう」と、暗い川沿いの道を足元に懐中電灯を照らしながら歩いていると、広い河原の上に架かる橋に村の人々も集まっていた。暫くすると風が止み、蒸し暑さを感じていると、河原の葉蔭から蛍が一斉に夜空に浮かびあがってきた。更に川面を飛ぶ蛍の光がキラキラと夜の川の流れに反射してなんとも奇麗だ。突然、後ろから大きな明りに驚いて反対側の欄干に駆け寄りたまたま隣り合わせた人に「あれは？」思わず声をかけると「岡山空港から飛び立つ飛行機のライトですよ。ああ、原田さんですか。」との返事。驚いて隣あわせた女性の顔を覗き込むと、偶然だが、まるでその時間に橋の上での待ち合わせたかのように出会ったのは、一か月ほど前下見の時にご挨拶した緒方洪庵顕彰会会長の奥様だった。

緒方洪庵の里で、夜空の星と共に源氏蛍が河原を乱舞していた。怖いほど奇麗だった。バスまで送っていただいた会長と写真を撮ってお別れした。



足守から約30分、**苫田温泉「いやしの宿 泉水」**に着いた。源泉かけ流しラドン温泉の岩風呂と名物の備前焼風呂にゆっくり浸かって3部屋に分かれて就寝。

翌朝も晴天。また朝風呂にはいってすっきりとしたところで朝食をとり、8時半に宿を後にした。

鞆の浦で出会った朝鮮通信使と坂本龍馬

バスは一路、鞆の浦周辺が混むからと岡山の山懐から福山の鞆の浦を目指してひた走る。思ったよりも周辺の道は混雑しておらず10時半には、宮崎駿監督の映画「崖の上のポニョ」の舞台でもある鞆の浦に辿り着いた。

今回鞆の浦を訪ねる目的は、花外楼で再現した大阪での朝鮮通信使への饗応料理と講演会のなかで、講師の仲尾先生からお聞きした朝鮮通信使が

「日東第一形勝」と賞賛し、坂本龍馬が紀州藩と談判した**福禅寺・対潮楼**からの瀬戸内の風景を眺めることだった。近くでバスを止め、階段をあがった。建物の中に入ると、海に向かって開け放された窓から弁天島と仙酔島が屏風絵のように目に飛び込んでくる。少し曇っていたが、朝に夕に四季折々の瀬戸内の海の風情を、動く屏風絵のように眺めることができる。千手観音をお参りし、本堂の前で記念写真を撮る。

坂道を下り海辺に出る。景観保全か開発かで話題になっている鞆の浦の分岐に立つ。生活道路が細い為にここから



湾の向こうまで橋を架けるか埋め立てるかして利便性を図りたいというのが開発派の提案だ。突き出た岬に現存する江戸時代の常夜灯は日本一高く、「雁木」といわれる干潮でも船荷の積み下ろしができる船着場の石段が200メートルも残っているのは鞆の浦だけだという。橋や埋め立て地ができればいくらか便利になるだろうが、江戸時代の風景が壊されてしまうというのが景観保全派の主張はここから一目瞭然。その行く先を気にしながら記念写真を撮った。



そして「鞆の浦」は大河ドラマで話題になった坂本龍馬ブームで押し掛ける人の波にのり、江戸時代の蔵をそのまま利用した「**いろは丸展示館**」にも多くの人が押し寄せていた。事件は、慶応3年(1867)4月23日、霧の深い深夜、紀州藩明光丸(887トン)にいろは丸(160トン)が衝突され、いろは丸は大破し、沈没した。1987年から鞆の浦の沖で潜水調査で引き上げられた品々や2階には龍馬の隠れ部屋を再現し展示されていた。ゆっくりと見学している間に昼前になった。

平成いろは丸に乗り仙酔島で桜鯛料理を満喫

激しい潮の流れに磨かれた美味しい鯛を賞味しようと、「平成いろは丸」に乗って仙酔島へ渡る。



昼食は海鮮和食処で**鯛の兜煮・鯛のお刺身・鯛ご飯**に、鳥鍋付きの『**坂本竜馬膳**』に、鯛の塩釜焼き、鯛素麺と、鯛を満喫した。到着時間に合



せて熱々の塩で固められた**鯛の塩釜焼き**がまな板に乗せられて運ばれてきて、木槌でたたき割ると白い湯気をあげて、鯛の姿が現れる。塩で

蒸した状態なので皮も身もジューシーでふっくらと旨みが口いっぱいになりなんと美味。**鯛素麺**は、温かい鯛の煮汁に素麺をいれ、煮た鯛の身をほぐして錦糸玉子や海苔・胡麻や葱などの薬味で味わう初体験の鯛の旨みと共に味わう鯛素麺は新感覚で美味。



海を眺めながら鯛三昧の昼食でお腹がポニョになったと大騒ぎ！



そして、またまた平成いろは丸に乗って対岸の鞆の浦にもどり、30分ほどの土産を買う為の自由行動後、豆腐屋

さんの名物**大豆バーガー**を買って一路大阪に向かってバスはひた走り、7時に大阪駅にもどり、淀屋橋・難波・天王寺を経由しそれぞれが旅の思い出を胸に家路についた。

参加者：**塾生**：青木千代江・井上章・大森史子・北原祥三・下野譲・原田彰子・森川千世子・宮本雅彦・米川俊信 **一般**：池崎敬子・枝松緑・辻本智子・宮田千寿子・向内美枝子